ラヴ・オブ・ザ・ワールド？

杉岡丘波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラヴ・オブ・ザ・ワールド？

【Ｎコード】

Ｎ３９４３Ｌ

【作者名】

杉岡丘波

【あらすじ】

ふと魔法カードを発動したらそこはなんと遊戯王の世界の中に！

（ちなみに筆者の猛烈妄想な遊戯王のルインの話です）

ルイン様との出会い

「ルイン様ールイン様ー！」

ここはとあるところにある城。けれども日本ではない。ましてや一般人が呼ぶ『世界』というものでもない。ある意味特別な世界。この世に確かに存在する世界の一つ。そこにこの城はあった。

「ルイン様、いますか？」

俺はとある部屋をノックする。この城の主のルインさまの部屋だ。なぜ俺がこんなことをしているのかは分からない。ただ一つわかることはルインさまに気に入られていることだった。そうたぶん地球でいうところの一年前までさかのぼることになる。

世界中でブームになっている遊戯王。人気はとどまることを知らずに世界中に広まっている。可愛いモンスターや面白いモンスター、カッコイイモンスターのカードが人気を呼んでいる。違う理由もある。それは海馬コーポレーションが作ったソリッドビジョンだった。

美しい３Ｄのキャラがスムーズに動く。まるでそのモンスターと一緒に戦っている錯覚を起こさせるような映像。それが人気の一つでもあるだろう。

俺山並卓（やまなみすぐる）もそれにはまっていた一人だった。デュエリストといえば俺はどちらかと言うとマニアックな部類に入るだろう。俺のキーカードは破滅の女神ルインと呼ばれるカードだったからだ。

他の皆は出すだけで劇的にフィールドを変えてしまうカードがキーカードだった。もともと破滅の女神ルインなんて使う人はそういないだろう。俺は少なくとも会ったことはない。

そんな俺は路地裏でとあるお婆さんと出会った。デュエルディスクのカスタムパーツと言ってただでくれたのものがあった。それはフィールド魔法で『もう一つの世界』という名前のカードだった。効果は書かれておらず絵には丸い穴しか書かれていなかった。

家に帰りデュエルディスクでルインを出したりシャインエンジェルを出したりしていたらふともらったカードを思い出して発動してみた。そしたら城の中庭に召喚されてしまった。そこから俺とルイン様が出会ったのだった。

「お主は何者だ？　この城にどうやってきたんだ」
ルインの横に居た巫女服みたいなものを着た女性がそう喋る。
「えっと俺は日本からここに飛ばされて」
「ニホン？　そんな世界は知らない。怪しいな」
彼女は俺の喉元に剣を突き立てて睨む。
「まぁまてシュザンヌ。久しぶりだな山並卓」
ティーカップで何かを飲んでいたルインがこちらを向く。俺を知っているのか
「ルインさまのご知り合いですか？」
「ああ、向こうの世界の時に世話になった」
「それは失礼しました。ここ最近ルインさまに近寄るゲスでキモイ男が増えているのでそっち関連かと」
何があったんだ……モンスターたちも色々都合があるのかな。って！！　普通に納得しているけど常識的に考えればこれっておかしいことだよな。
「あのときは助かったぞ、卓」
「あ、えっと、どうも」
「覚えていないだろう」
ルインの的確なツッコミにうろたえてしまう。そのとおりまったく覚えていないのだ。
「私のことを助けてくれただろう。あの公園で」
……公園か、えっとう～ん？　あ。
「ルーちゃん……」
「そうだ、そのルーちゃんだ。あのときは新鮮だったぞ。なにせ『ルイン様』と常々言われていたこの私が始めてあだ名をつけられた。

本当に愉快だったな」
　愉快そうに笑い始めるルイン。こんな感じだったけ？　昔はこう、なんというかすぐに涙目になってた気が……
「まぁ苛められたときもその、ありがとう。人間に苛められるのは少し堪えたがな」
「小さいときは可愛い子を苛めたくなるともいいますし」
「そういうことにしておこう。さて本題だ。どうやってここまで来れたのだ？　ここは山の中。さらには結界も張ってある。しかし結界は上級のものは通してしまうから場所さえしってれば来れるかもしれないな。けれども格好からいって山を登れるわけが無い見た目と魔力だ。さてどうやってきたんだ」
「え、えっと変なお婆さんから紙をもらってそれを使ってみたら……」
　二人の顔がさぁっと青ざめる。
「す、すまないが卓……その婆さんなのだが顔に刺青がなかったか？」
「え、あ、そういえばあったような」
　二人とも顔に凄く汗をかいていた。何かあったのか？
「ルルル、ルル、ルインさまぁぁあああ！！」
「お、お落ち着くんだ。従者のお前が取り乱してどうする」
「なにがあるんですか？」
「そ、そいつは我が城の専属の魔術師だ。時々からかい半分で魔法を使うことがある困った人なのだ。お前がそいつの力でここに来たということは戻れないのだ。それに何かあるのかもしれない。詳しくは分からないのだが」
　ルイン、あなたが一番落ち着いてください。
「ルイン様！　私正直やっていく自信ありません！　爆弾になっていたらここからすぐに飛ばさないと！」
　そのセリフを聞いて初めて自分も顔を青ざめる。ば、ばくだん？
「しかしまだ何も起きていないのだから警戒しなくてもいいのかも

な。そうだ専属の執事に任命しよう。それなら目もつけやすいしいいな」
　ルインが顔を青ざめながらいう。確実に取り乱しているな。これ。というかどれだけ恐怖の対象？
「はろろーん、ルインちゃーんエンジョイしてるー？」
　そこに軽快なステップを踏みながら陽気な声で話しかける少女がいた。
「婆さん！」
「婆さん！？」
　ルインのセリフに驚く。えっと路地裏の居たお婆さんはもっとしわしわだった気が。
「おーあのときの少年ー元気ー？　いや着たばっかりかー」
「お、おまえ卓に何をした！」
「んー特になにもーただ可愛いし魔術のセンスもあるからこっちの世界で弟子にしようと思っていただけだよんー」
　そういうと婆さん（ルインがいってるので）が俺に抱き付いてくる。大きな胸が俺の体に当たりくらっときてしまう。
「な、なにやって！」
「いいじゃないー。私が気に入ったからこっちに連れてきたんだしー」
「ぬぬ、あーもう！　卓は私の執事になったんだ！」
　え、その話ほんとだったの？
「えーもうひどいぃーールインちゃんってほんと独占欲高いんだからー。ま、いっか戻せっていってるんじゃないんだしー。執事になっても同じお城で働いてるんだから魔術の練習くらいできるか」
「えっと……正直戻してほしいのですが」
「（スルー）ルインちゃん本棚もっと増やしたいんだけど」
「はぁ……すいません」
　侍女らしい女性はため息をついて謝ってくれた。
「いえいえ。それよりあなたも大変ですね」

「ええ」
はぁ……と侍女のひとはもう一度ため息をした。
そんなこんなで俺は執事になったのだ。婆さんの名前はパリアらしい。伝説の魔術師らしいのだが軽い口調と見れば見るほど若く感じる体からはまったくそんなのを想像させていない。年齢は本人曰く永遠の１５歳らしい。ルイン様から聞いた話では約１２７５歳らしいが定かではない。そんな彼女は時々俺に魔法を教えてくれる。いつもの学校でやっていた授業とは比べ物にならないほど楽しかった。きちんと向き合って教えてくれて分かりやすく飽きることはない。
侍女のシュザンヌさんからは主人に仕えるための基礎を学んだ。これも凄くためになりあきることはなかった。自分を知らないことを学んで俺は学ぶことの楽しさも学べた。感謝していた。もといた世界じゃこんなに充実していなかったからだ。
明日はデミス様が来るらしい。ルイン様は嫌らしい。がどうやらデミスのことでなくそこにいる大臣が嫌いらしい。いやらしい目で見てくるからだそうだ。訪問回数は多いがパリア師匠曰く『デミスはルインちゃんに興味ないっぽい』とのことだ。デミスはあんまりルインには興味ないらしい。政略結婚なんだろう。なんかそういうの嫌だな。まぁ俺ごときじゃ何にも出来ないけど。

ルイン様との出会い（後書き）

えーはいすいません。ルインがめっちゃ好きなんです。ほんとすきなんです。めっちゃ美人じゃないですか！
え？弱い？弱いっていったてめぇ表出ろ。

結局なんだったんだろう

「ルイン様失礼しまーす」
ガチャリと俺はルイン様の寝室の扉を開ける。そのベッドの上にはいつもどおりに裸でうつ伏せに寝ている人がいた。（ちなみに気温は約１２度。みんなここは山の中だよ？）
ルイン様の体はやはり凄く綺麗である背中からでもわかるこのスタイルのよさ。たぶん世の中の女性はうらやむだろう。しかし残念なのは胸かな？　少し控えめで……ってそんなこと言ってる場合じゃない。起こさないと。
「起きてくださいルイン様」
「うるさい。寝る」
「わかりました。また明日お越しにきます」
そのまま俺は部屋から出る。無理に起こすことは無いだろう。どうせデミス様くるの明日だし。
「あ、すぐるー！　ってあれルインちゃんは？」
「うるさい。寝るとのことだったので起こしていません」
「そっか。ま、いっか。起こすのめんどくさいし」
「ええ」
本当に伝説の魔法使いとは思えない。というか明らかに若い。絶対若返りの魔法とか使っているんだろうな……
「今日は用事あるの？」
「いえ、ありませんよ。師匠。なにせ主人が起こすなといいましたから」
「それなら街に行こうよ。魔法具もいい加減補充しないとダメだしねー」
「わかりました。服はこの執事服でいいですかね？」
「いいよーというかむしろそっちでーやっぱ可愛い子には執事服っていうのは似合うよね」

「あはは……」
師匠の魔法で街までワープする。このワープ魔法なのだが一度行って魔力の痕跡を残さないと使用できないというデメリットが存在する。師匠の説明ではワープをする対象を分解しその魔力の粒子を魔力の痕跡があるところに流れ込ませそこで再構築することでワープができ。痕跡がないとそこに集まれず粒子がばらばらになり元通りになれないとのこと。まぁ少し怖いが楽な移動手段だった。もともと城は……山の中ですしね。山の中を降りていくよりなら少し怖いけどこっちのほうが凄く楽です。

そんなこんなで街に到着する。着いてからは師匠が行きつけの魔法具店に寄ったり大道芸を見たりいろいろのんびりとしていた。魔法の呪文書もたくさんあったしカードの中で見たモンスターや見たことの無いモンスターがたくさんいて楽しく何より新鮮だった。
「時間もなかなかいい頃合だと思うしもどろっかー」
「ええ」
「あ、そうだお菓子買っておかないとルインちゃん拗ねちゃうよ」
「……なんだかんだ言って『起こしてよ！』っていう感じですからね」
「うんうん。でもそこもルインちゃんの可愛いところだよ～」
「そういえばなぜ婆さんと呼ばれてるんですか？」
「え、あーそれはね。一時期老婆の姿にはまっていたことがあってねーそれでその姿で悪戯してたら自然にね。まぁあと自分これでも長く生きてるからね。でも心は一生１５歳～♪」
「そうなんですか」
わかったようなわからないような。
「ルインちゃんのお土産はえっとーこれかな」
生クリームがふんだんに使われたかなり美味そうなプリンパフェだった。それなら喜びそうだ。
「これをそーだなー４つでー。にへへーこれで軽いお茶会でもしよ

ー」
「師匠って意外に仲間思い？」
「元からだよ♪」
満面の笑みでそうおっしゃる師匠。でもこの人腹黒いところあるからな……本当なのかは定かでは無い。

「ただいまールインちゃん～」
「おい！　何で卓を連れて行く！」
「いいじゃーん寝てるっていったんだし～」
そういうと買っておいたプリンパフェを取り出す。ふと思えばこの食べ物って元の世界と似てるな……
「はいお土産。シュザンヌちゃ～んお茶ちょーだい～」
「え、ええ。分かりました」
「まぁこれでも食べて落ち着いてー」
「う、ま、まぁ仕方ない……そうだ卓。今度は私と行かないか？」
「ええ。惰眠を貪っていなかったら今度行きましょ」
「そうだ！　明日行こう卓！」
「明日はデミス様と会う日です♪」
「卓……意地悪」
「いえいえーこれはあなた様の為ですので。ほら自分の分も上げますよ」
「……あやされてる気がするけど仕方ない。今日はこれで勘弁してやる」
甘いものに弱いんだな……。やっぱりルイン様も女性なんだよなー仕えてるとよく忘れそうになる。男らしい面を見ることが多いからかな。
「でも今日はなんか生意気だな。そうだな。罰として明日までに私の服やもろもろの物の準備を全て一人でやってくれ」
「え！？　それはさすがにご勘弁を！！」
「いやだ。では任せるとしよう。がんばりなさい」

えっと確かドレスの選別にデミス様のための部屋、食堂、浴場の掃除、変な生き物の餌の用意にもろもろ……地獄だ……

「ではこれを」

そう言われてシュザンヌさんからバケツとモップ、洗剤を渡された。

マジだったんだ……

「安心してください。私も手伝いますので」

「あ、ありがとうございます！」

シュザンヌさんの優しさに心があったかくなりました。

「失敗したら尻拭いはメイド長である私なのでそれなら最初からやったほうがいいじゃないですか」

シュザンヌさんの優しさにほんと涙が出てきました……。

「それではデミスさんの部屋お願いしますね。男同士ということでやりやすいと思いますので」

「わかりましたー」

「えっとーこれはここでーあれはこっちでー」

ある程度道具の配置を書いてある紙を見ながら片付ける。

「……（ツンツン）」

俺の近くに小さな女の子がいた。陶磁器のような真っ白い肌をしその肌と同じように髪も真っ白な女の子だった。

「えっとどうしたんです？」

「……新顔？」

「ええ、一応新顔の使用人です」

彼女から離れて仕事をしていくと彼女はてくてくとついてくる

「今仕事中なのでですが」

「実は私も……」

いやそれはダメなんじゃ

「ってその仕事はスパイだったり……」

「スパイ？」
あ、スパイとかじゃないなこれ。反応が本当にいらない人の感じだもんな。
「疑ってごめんね。俺は卓って言うんだよろしくね」
「……そっか。私はミラっていうの……よろしく」
そこから少し話をした。何気ない話をちょっぴりと。
真っ白な女の子は突然窓から出て行こうとする。
「あ！」
「？」
自分は思わず引きとめてしまった。当然彼女は首をかしげた。
「えっと！　また今度！！」
自分はなんでこんなセリフを言ったんだと思った。けれども彼女は微笑してうなずいてくれた。
「うん……また今度」
そう答えるとすぐに窓から出て行ってしまった。不思議な女の子だったな。

「すぐーるー」
「あ、師匠」
「本当にやってるよ……」
「ははは……」
「ここを掃除すればいいの？」
「ええ、でも一人で出来ますから」
「……えっとさー何のための師匠なんだろ自分」
えっと魔法の師匠だよね？
「手本みせるよぉー」
そういうと師匠は手のひらに風を集め床の床下から上に風で埃を巻き上げ空中に浮べる。そこより少し低いところに水の薄い膜を張る。風が止みそこの膜に埃がくっついていく。それが段々収縮ささっていき小さな雲になっていく。それをゴミ箱に捨てる。

「こんなものだよ」
「師匠すご……こうやって使い分けると日常生活にも応用できるんですね」
「ふふんー」
でもこれって普通はやらないよね。シュザンヌさんも箒とか用意してたし。
「それでは他のところをやってきますね」
「えーあそぼー」
「あとででお願いします」
「そうだな。あとでにしてもらえないか？　婆さん」
「え？　ルイン様？」
自分が扉を開けたらそこにはルイン様がいた。どうしてだろう？
「ルインちゃん……暇なんだもん」
「だからといって仕事中のやつを遊びに誘うのはどうなのだ？」
「卓に仕事をわざと……は、謀ったのね！」
「はん、何のことやら」
あれ？　なんだか一触即発な雰囲気……
「上等よ。ケリをつけてあげるわ。この追撃に特化しているドＳ女！」
「若作り婆が私に勝てると思うなよ？」
「えっとぉーそれじゃ自分は別の部屋の掃除に行ってきますね」
自分はそそくさと部屋から逃げた。
『空破三連華！！』
『甘いわねぇ！　ウィンドバースト！！　……チッ、相殺するとはルインちゃんも少しは動きがよくなったんじゃない？』
『ふん！　私の力を舐めてもらった困るわね』
『けれども接近戦に持ち込まなければいいこと！！』
なんか壮絶な戦いを繰り広げられてる気がする……うん、気のせい。気のせいだろう。

結局なんだったんだろう（後書き）

へい！　ルインの効果を読んでみて思ったことが。戦闘でもモンスターを倒した場合もう一度だけ攻撃できる。っということはダブルアタックとかと組み合わせると４回攻撃できるんじゃ……それはないか。

さて今回友人が見たらしく。（正直恥ずかしくて死にそうだった）なんかギャルゲーみたいといわれました。言われてみればそうかもしれませんね

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3943l/

ラヴ・オブ・ザ・ワールド？

2010年10月13日12時09分発行